

お寺とはどういう場所だろうか。日本においてお寺は時代や地域によってその在り方が変化してきた。そして、江戸時代から約 300 年続いてきた檀家制度は限界を迎えつつある。これからのお寺には、どんな風景が広がっていて、どんな可能性があるのだろうか。



はじまりの風景

スリランカでは、木の下で僧侶が説法する風景が見られる。その風景には自由さやおおらかさがある。助けてくれる（説法）僧侶との関係性がお寺の在り方を決める。日本において、木の下もお寺になるような人と僧侶の関係性の構築は可能だろうか。



これからのお寺の在り方を考える

生活の場

お寺の食堂に食べに行く



お寺の食堂で料理をつくる

相談の場

悩みや困ったことを相談しに行ける



気軽に相談される
ような懐かさ

弔いの場

日常の関係の積み重ねから
そのお寺が最期の場所になりうる

よく見知った人の供養をする



寛永寺の子院群として

江戸時代、上野に寛永寺が建てられた際、その子院が谷中に集中して建てられたのが寺町としてのルーツである。しだいに、引退した僧侶の隠居先である子院が、お寺としてふるまったり、被災したお寺が引っ越してきたりして、参拝客が増え、お店も増えていった。お寺の入れ替わりなどはあるものの、街区構成は江戸時代から変わっていない部分が多く見られる。



江戸時代の谷中



江戸時代の寛永寺（現在のの上野公園）

小規模の集合



小規模な建物が密集している中、小さな寺は密集し、大きな面として閉ざされた場所を形成している。しかしそれは同時に、密集の中の大きなヴォイド空間としての可能性を秘めている。

敷地に面する道



北側（生活動線）



東側（観光動線）



西側（生活動線）



南側（交通動線）



敷地内の環境



①敷地内の小さなお店



②場をつくる木



③高密に置かれた墓石



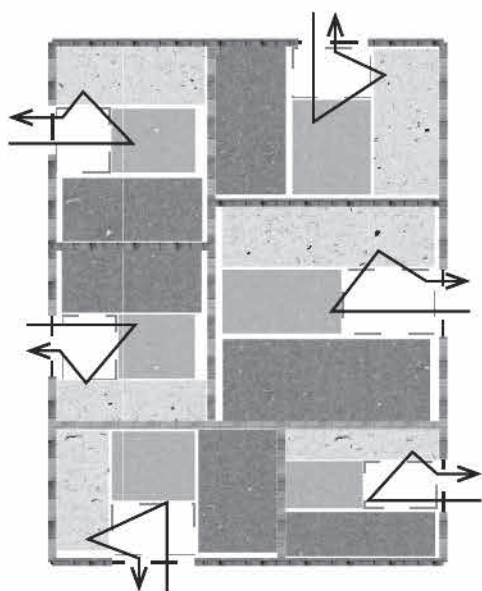
④固く敷地を閉ざす壁



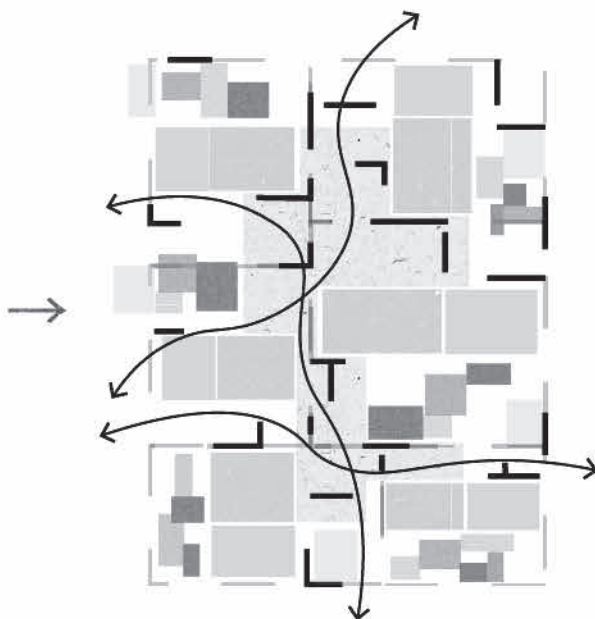
⑤境内に食い込む駐車場



⑥プライベートな僧侶の住居

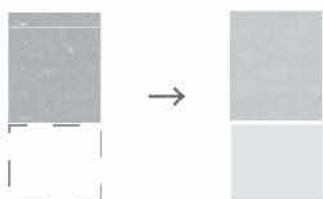


街区に集まりながら独立した寺院群



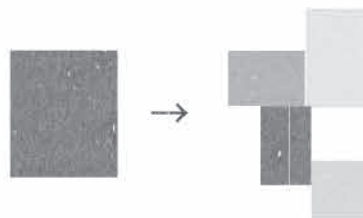
境内の手前は地域に開かれ、境内の奥は吊いの庭となる

本堂が開かれる



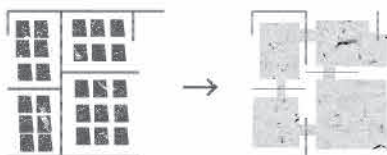
本堂を開き、地域の場所としても利用することで、前庭空間は町の一部となる。本堂を開く際は、境内の「奥」が失われないように一部の壁は残す。

僧侶の家が開かれる



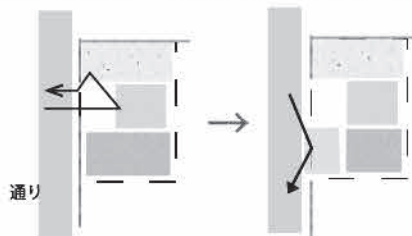
1つの箱でプライベートを全て閉じるのではなく、僧侶の生活が境内と連続するようにする。小さなあずまやのような空間を集めて、人を迎え入れる場所をつくる。

塀を再構築し、1家系1墓石から、吊いの庭での散骨とする



墓石が風景として美しくなるには、適切な密度がある。狭小敷地のお寺は、個別に独立した祈りの対象ではなく、墓地庭園に散骨をする方式を取ること、祈りの場を共有する。吊いの庭では、木の下で僧侶のお話が始まる。

通りの近くには、生活のプログラムをつくる



お寺が地域の人たちの日常の一部となるように通りの近くに、食堂や銭湯といったお寺直営のプログラムをつくる。



